



フロラ・トリスタン著・小杉隆芳・浜本正文訳『ロンドン散策』一九八七年三月・叢書ユニベルシタス・法政大学出版局刊：イギリスの貴族階級とプロレタリア

著者	小倉 襄二
雑誌名	評論・社会科学
号	34
ページ	128-133
発行年	1987-11-16
権利	同志社大学人文学会
URL	http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000002020

〔書評〕

フロラ・トリスタン著・小杉隆芳・浜本正文訳

『ロンドン散策』一九八七年三月・ハ叢書ユニベルシタスV・法政大学出版局刊

——イギリスの貴族階級とプロレタリア——

小倉 襄 二

I

福祉国家の形成、その政策内容や制度にとって十九世紀の英国の状況は決定的な意味をもっている。この間の錯綜した事情については、M・ブルースの『福祉国家への歩み』——イギリスの辿った途——(秋田成就訳、一九八四・三・法政大学出版局)においても詳細に述べられている。福祉国家論の場合はその論点が政策決定、その改革、システムの諸条件の解明が重視されることは止むを得ない。M・ブルースの場合においても十九世紀の歴史上の状況については、一八三四年の救貧法改正、その運用を軸としてハヴィクトリア時代の救貧法Vという標題で扱われている。ハヴィクトリア時代の救貧法Vの内容と経過は二十世紀にむかう福祉国家の形成、とくにそれにつづくエドワード時代、一九〇五年か

ら一四年にかけての一連の社会改革、救貧法委員会や、自由党の改革、国民健康保険法の制定、失業対策、老齢年金、教育政策などの周知の諸改革に連動する重要な政策決定として中枢的な位置を付与されている。一九世紀は産業革命の衝撃をうけて社会問題としてのハ貧困Vが多様に拡大し激化した時期でもある。さきの救貧法改正もこの衝撃に直面してアンシャン・レジームとしての旧救貧法体制が崩壊、再編に追いこまれたと解釈されている。この十九世紀の『衝撃』の実態とはいかなるものであったか。

トーマス・カーライルも『過去と現在』(一八四二)のなかで一八四〇年ごろの英国について述べている。「英国は富に充ち、人間のあらゆる種類の欲求を充たすべきものに満ちている。にもかかわらず、英国は栄養不良で死にかかっている。昔と変らぬ豊かさで英国の国土は栄華爛漫と繁栄している。捻った穀物は黄金

色に波打ち、工場は楯比し、産業機械は数知れず、歴史始まって以来の器用で勤勉な労働者が一五〇〇万もいる。」ところが「これら成功した熟練労働者のうち約二〇〇万が労働場ファクトリー、つまり救済法による牢獄に座っているか摒越しの院外救済をうけている。まさにワーク・ハウスという名のバステューユは張り裂げんばかりの満員である。その他何十万という貧民はまだワーク・ハウスにさえありつけない有様である。」と。しかし制度論、その改変の段階では類型的な対策の処理やそのスケールは理解できても、いかなる具体的な社会状況であったかについては多くの未知の領域がひろがっている。

フロラ・トリスタンの『ロンドン散策』は、『奇書』ともいうべき著作であって、訳者のあとがきによれば、馴染みのない名前、まして、本書に至っては、限られた一部の人を除けばその存在すら知られていない著作であったようである。しかしながら英国の一九世紀、その社会史、社会問題を具体性をもって知るうえで本書は不可欠の基本文献の一つと考えられる。

F・エンゲルスの『イギリスにおける労働者階級の状態』(一八四五年刊)はこの一九世紀の衝撃としての社会問題とその状況を知るうえで古典的な文献であるが本書はその視点、記述の方法、狙いについては独特の対照的な構成となっている。この著作はF・エンゲルより五年早く一八四〇年にパリとロンドンで同時に出版されている。

『ロンドン散策』

II

著者フロラ・トリスタン(Flora Tristan)は一九世紀のフランスの女性社会主義者、一八〇三年にパリで生れて一八四四年の末にポルドーで没した。不遇と貧困と性差別に苦しんだが、大胆な行動と感受性にめぐまれて、生涯、女性の解放、労働者の自立と連帯のために働いた。『労働者連合』(一八四三)の著作もあり、訳者あとがきによればハユニオン殿堂、労働者の階級的連帯の拠点であり、農、工業を主体に、労働者のための文化、教育、養老施設の併設された二―三千人単位の生活共同体で、フロラは、これを労働者の自主的な拠金でフランス各地に建設せよといったユニークな主張も行っている。攻撃的フェミニストとして離婚制度の復活、死刑廃止、さまざまな社会主義的社会改革案を提出する熱烈な民衆運動家として紹介されている。多くの著作もあるが本書こそフロラの個性、能力の最大限に發揮された代表作と評価されている。フロラ・トリスタンの娘アリーヌはのちにポール・ゴーギャンの母となる。このように十九世紀の時代のかたちと激動を体現した人物の著作として、本書は独自の意義をもって今日にもつよく訴えかけている。

本書の編者としてフランソワ・ベリイダが序言のなかで、的確に本書の狙いを要約している。それによると、フロラは四度の渡英と当時の英国についても多くの著作、調査報告書などを検討するなかで、英国―スタンダールが『われわれの未来の鏡』と形容

する英国、社会科学研究がはじめて成り立ち、社会科学研究にとって非常に恵まれたこのフィールドで、階級と性の不平等のメカニズムを分析し、貧困の根源を抉り出し、裕福な金持ちと労働する民衆とを分け隔てている巨大な溝を解明することが必要なのだ。また、これと同時に人々が常規を逸した行動に陥るまでの行程を分析したり、軽犯罪者や犯人、売春婦など社会の余計者や除け者たちの運命を簡潔に証明することも重要である。暗黒地帯を発見する毎に心を傷めるフロラの敏感な感受性にもかかわらず（むしろそれゆえに）、華美に満ちた上流階級のお屋敷街から下層階級のどん底地帯、すなわちスラム街から養老院や監獄に至るまで、ほとんどのページからも民族誌学的な価値が引き出されてくると述べている。

フロラ・トリスタンが本書の「献辞」、*「労働者階級へ」*のなかで、*「労働者の皆さん、私がこの本を献呈するのは、あなた方男女労働者のすべてに対してです。私がこの本を書いたのも、ぜひともあなた方の置かれた状態をあなた方に知ってもらいたいと思っただけです。ですから本書はあなた方のものなのです」と*よびかけている。フランスの労働者とその社会改革をすすめることへの連帯はこの英国の社会状況の解明にあたって不断に意識されている。*「プロレタリアよ、この私の本は、イギリスが万人の注視の下で繰り広げている壮大な社会劇を解説しようとするものです。それは、あなた方に、非常に強力でかつまた民衆にとって実に犯罪的なイギリスの門閥政治の示す情け容赦のないエゴイズム、正*

視に耐えられないようなその偽善ぶり度外れた残酷性を認識してもらおうというものです」と訴えている。

フロラ・トリスタンがこうした希いのもとに解きあかそうとした十九世紀英国の社会劇とはどのような舞台、登場人物群であったらうか。当然のことながらその注視した社会像は鮮烈であり苛烈なものに充ちていた。

本書の標題がしめすように主要な舞台はロンドンである。内容は一七の章にわかれ加えて、スケッチ、さらに補遺によって構成されている。1、怪物都市―その現在の役割、その将来・運命。

2、ロンドンの気候―その道徳への影響。3、ロンドン人の性格―ロンドン住民の生活度。4、ロンドンの外国人―その不安定な立場。5、チャーティスト―この強力な協会の精神・組織・力。

6、国会訪問―イギリスの風俗習慣。7、工場労働者―彼らの貧困とその犠牲となつている搾取の実態。8、売春婦―売春の原因。9、監獄―長い関守られてきた制度のもつ諸悪。10、セント

「ジャイルズ教区(アイルランド人地区)―そこで目にする恐るべき貧困について。11、ユダヤ人地区―その商売。12、盗品のスカ

ーフ―これらのスカーフをめぐる法外の取引。13、アスコット・ヒースの競馬―イギリスの風俗習慣。14、ワートルローとナポレオン―ワートルローの闘いの思いがけない結果。15、ベツレヘム病院―イギリスでの精神異常の原因。16、幼児学園―その悪しき組織。17、イギリスの女性たち―その伝統性。スケッチは八項目。このほかに老人の無為な生活。少年労働など、補遺にはオー

エンについての記述が入っている。F・エンゲルスも、さきの『イギリスにおける労働者階級の状態』の一八四五年版（新潮社版）の序においてフロラ・トリスタントおなじく「大ブリテンの労働者階級によせる」献辞がある。『労働者諸君！諸君にわたしは一冊の書物をささげる。この書物のなかで、わたしは、わたしのドイツの同胞にたいして、諸君の状態、諸君の苦悩と闘争、諸君の希望と見とおしの忠実な描写をしめそうとこころみた』と述べている。『ロンドン散策』の項目との対比でみると十二の章に分れ、1、序論。2、工業プロレタリアート。3、大都市。4、競争。5、アイルランド人の移住。6、諸結果。7、個々の労働部門―狭義の工場労働者。8、その他の部門。9、労働者運動。10、鉱山プロレタリアート。11、農業プロレタリアート。12、プロレタリアートにたいするブルジョアジーの態度となつていてその対比は興味ぶかい。その「献辞」とそれぞれの祖国の労働者階級の運命への配慮。項目の選択に共通性もある。編者フランソワ・ペリダによるとドミニク・ドザンティはF・エンゲルスは実際に本書を広範囲にわたって利用していると主張している。さらに類似点があつても両者には視点のきわだった違いがある。フロラ・トリスタンの舞台は当時人口二〇〇万余その三分の一が貧民層という怪物都市ロンドンであり、エンゲルスはマンチエスタ―に研究の土台を置いたこと、フロラが本書の副題「貴族階級とプロレタリア」にせめられるように搾取と抑圧するのは貴族階級と考え、エンゲルスはあきらかにブルジョアジーの支配による

『ロンドン散策』

と視ていたことにその基本的相違があり、そのことがひいては各項（章）の主題のちがひともなっているのではないかとする指摘がある。

III

フロラ・トリスタンが英国社会の内にかかえる病理への的確な診断。これを切開する鮮かな手口に接すると攻撃的フェミニスト、大衆へのプロパガンダリストというよりも、むしろ冷静な社会観察家、ルポルタージュ作家こそフロラの本来の姿ではないかとさえ思えてくる（訳者あとがき参照）。たしかにそのような面もあるが、産業革命の衝撃と社会問題。その惨害にみちた担い手たちの運命への鋭い状況認識と熱っぽい人間的な共感がそれぞれの主題に脈動しているようである。売春、狂気、監獄、工場労働者などの各項目にとくにフロラの想いが注がれている。

たとえばカーライルの指摘にもあつたがフロラは工場労働者については英国のプロレタリアを知つてからというものはもう奴隷制が人類最大の不幸事などと思えなくなつた、唄も私語もなく天井の低い部屋に一日、一二、三時間も閉じ込められ、汚れた空気と一緒に木綿、羊毛、亜麻の糸くずや銅、鉛、鉄の微片を吸い込み、加えて過度の飲酒のせいだろうか満足な食事もとらぬ日もしょっちゅう、その目はまるで死人の目のようだと悲慘を語っている。フロラはヴィクトリア期の性の抑圧の背面にうごめく売春を鋭く指摘した。その売春婦についての描写はとくに激しくふ

みにじられる性への憤りも深い。ロンドンでは国民の華たる人——
一〇万人の女性が売春で生計をたて、五千ヶ所の売春宿があり、
このワナにかこまれた不幸な女性の一・五—二万人がみすてられ
た死にみまわれる。『売春は犯罪ではない業苦である』（コンス
タン）。こうした醜悪な行為を生む原因は現下の社会状況にある
こと、ロンドンでの売春宿の情景の手のほどこしのようなない乱
脈ぶりを描いて人間の崩壊、人身売買についても詳細な観察があ
る。ニューゲイト監獄は野蠻そのものであった。女囚のこと、死
刑囚処刑のこと、矯正院（ハクスボーン・プリズン）の描写、行刑とその装置としての監獄描
写であり状況の批判もありヴィクトリア期の監獄のルポとしても
すぐれた箇所である。当時二〇万人以上のアイルランド人、ユダ
ヤ人地区、人間の悲惨の墮落の極み、児童による売春、劣悪、悪
臭にみちた居住状況、イングランドの優越のなかで至るところで
「賤民」として扱われ排除されたユダヤ人、ペチコート・レイン
の古着市の多彩な困苦と差別の状況などが生々と記録されてい
る。本書はいろいろの読み方が可能である。社会史として、Iに
みたように、救貧法の対象にかさなる部分、ヴィクトリア期にお
ける Poor、その子備群、あるいはそれらの背景としてよみこん
でいくこともできる。

この巨大な都会—その華やかさといえば途方もなく、貧困と
いえば想像を絶するほどの凄じさ。—をまるめて癩病のように覆っ
ている棄民（パリア）たち、哀れな民衆よ！ 神はあなた方を、
あの貴族たちのなすがまゝにしておくのだろうか。今日、イギリ

スの至るところで反乱と破壊の叫び声が沸き上っている。ああ！
貴族たちよ！ 今こそ悔い改める時だ。そして民衆の復讐を恐れ
るのだ」と英国ヴィクトリア期社会の不正と抑圧にきびしい発言
を行っている。その舞台ロンドン—怪物として巨大都市の繁栄。
見かけの外観に決して眩惑されない透徹した視座でこの社会史と
しての描出は成立している。

フロラは、ところが社会科学と言えば、人類の利益全体を含む
学問なのです。社会性（ソシヤリティ）の名において支配することは、万人共通の
幸福を目標にして統治することです。つまり個々人の利益と全体
の利益とを同時に考慮することなのです」と序で述べている。き
わめて、卒直で私たちの科学研究の現実にも映しだされる問いか
けでもある。

フロラの著作は一八四〇年であるから世紀末ではない。しか
し、フロラが視ていたロンドン。その散策のなかでとらえられた
諸相はすでにこの世紀末への多くの予兆を内包していた。社会改
革の「夜明け前」ともいえようか、フロラの視た闇の深さが黎明を
よぼうとしていた。そして、たとえば一八七〇年の法律により二
五六八の「学務委員会」が設立され、その三〇年の存在期間の中
に約二五〇万の学校建築用地を供給し他方一万四〇〇〇〇以上の私
立学校が補助金を受けた。ロンドン学務委員会だけで四〇〇校以
上を建設、今日の英国にみられる公立小学校が数多く建設されて
いる。暗黒から光へ、チャールズ・ブースも、その一つ一つが歩
哨のようにわれわれ次の世代の利益のための見張りを勤めている

とのべている。

もう一人の同時代の観察者コナン・ドイルは社会評論家の視点でその『ホームズ物語』においてこの事実を語っている。「海軍条約文書事件」でウイタールへ向って走る道すがらロンドンの家並みを見渡しながらシャーロック・ホームズとワトソンの交した話は想起するに値するであろう。「鉛色の海中のれんがの島のように屋根の上にそびて立っているあの巨大で寂しげな建物を見給え」「公立小学校だね」「灯台だよ、君、未来への狼煙だよ、一つ一つが何百という輝しい小さな種を蒔しそこから未来の賢しく立派な英国が芽生える筈なのだ。M・ブルースはこれは非凡なコナン・ドイルの思索の中からうまれた偉大な発見であったという。すでにシャーロック・ホームズの時代である。アーサー・コナン・ドイルのこの作品は、ロンドン、ベーカー街221-Bのホームズ、ワトソンの活躍する『ガス燈と霧のたれこめる舞台』でもあった。多くの矛盾のなかに改革の道筋の拓かれていたのも一九世紀。ヴィクトリア中期の状況であった。このホームズの『海軍条約文書事件』（一八九三年発表）のなかで社会諸改革の新しい芽吹きがあちこちにはじまったと述べているのも興味ぶかい。

フロラ・トリスタンの本書に関連してG・Mトレヴェリアン『イギリス社会史』2（松沢・今井訳・みすず書房・一九八三）第十五章・コベット時代のイングランドⅡが詳しい。角山栄・川北稔編『路地裏の大英帝国』—イギリス都市生活史—平凡社、一九八二）また長島伸一著『世紀末までの大英帝国』—近代イギ

リス社会生活史素描—法政大学出版社、一九八七）の関連項目が参考になる。

ヴィクトリア期の明・暗のコントラスト、とくにその暗部に注がれたフロラ・トリスタンの本書が公刊されることよってあらためてそのすぐれた著作としての価値を復権するにちがいない。

原著 (Flora Tristan, *Promenades dans Londres ou L'aristocratie et les prolétaires anglais*, Edition établie et commentée par François Bédarida François Maspéro, Paris 1978

法政大学出版社 四八六頁